

【社会科学】

【工学】

研究論文

五島の初期教会堂と集落形成について

村田 明久*¹

The Formation of an Initial Cathedral and a Christian Village
in the Goto Islands
MURATA Akihisa

Summary

In the 16th century, it is known that Almeida and Lorenzo conducted missionary work and preached Christianity in the Goto islands. However, it is not yet well known how Christian culture affected the formation of villages. I made Fukue and Okuura, which are the main church locations, an example and presented a hypothesis about the formation of villages and Christianity facilities.

Keywords : (formation, christian village, Fukue, Okuura)

十六世紀、海上列島の五島へキリスト教が伝わったのはアルメイダとロレンソの伝道によることは知られている。しかし、キリスト教文化がどのように集落形成に影響を与えたかについてはまだよく知られていない。主要な教会地であった福江と奥浦を例に、キリスト教施設等の集落形成について仮説の提示を試みた。

1. 福江

1.1 最初の説教所

1565年9月23日付、ジョアン・フェルナンデス修道士の書簡には、五島と宣教師の最初の交流が伝えられている。文中の「その地の国王」とは五島領主の宇久純定^{すみさだ}（十八代）、「その息子」とは宇久純僥^{すみたか}（十九代）である。「同港」とは「岐宿カ土岐カ奥浦辺ナリシカ」と推定されている⁽¹⁾。

「シナへの航路における日本の最初の港は、この平戸から約三十里の所にあって五島と称するが、本年、シヤムより多数の船が同港に到着し、これにより四、五名のポルトガル人が渡来した。その地の国王は家臣の一貴人を通じて、平戸のバルタザール・ダ・コスタ師に同所へ我らの教えを説きに行くよう（求める）書状を送った。その貴人とともに一人の通訳を遣わし、同通訳はもし司祭がそこへ赴くならば、彼（国王）とその息子はキリシタンとなり、領内に教会を建てるであろうと、彼に代わって述べた。司祭はこれに対し、口之津にいるコスメ・デ・トルレス師にこのことを報告して意見を仰ぎ、殿下が再び使者を遣わすならば行くであろうと答えた」⁽²⁾

当時の五島王府の所在について、クラッセは『日本西教史』（1715）で次のように述べている。

「都府ハ海ニ接近シテ港口ニ位置シオキコアト称ス、

*¹ 大学院 非常勤講師

此ニ国王ノ居第アリ」⁽³⁾

オキコア、大値賀、Ochicoa は福江の旧名である。これにより五島国王の居第は江川城であったであろう⁽⁴⁾。

江川城は、宇久盛定（十七代）が 1526 年（大永六）、江川（現在の福江川）河口の小高い地に築いた城のことである。慶長十九(1614)年八月十五日に焼失するまで続いた。盛定は 1540 年（天文九）に倭寇の王直と通商を結んで「唐人町」を開かせ、その高台にあった王直の居館敷地内の「明人堂」の史跡が現在も残っている。かつての江川は、陸地に真直ぐ河港を形成してから、江川城と唐人町の間を S 字型に大きく蛇行していた。江川南岸は、江川城を擁し、川側と海側に港のある城下を形成していたと考えられる。

フロイスは『日本史』の中で、西洋治療の求めと布教のため五島に行った経過を述べている。

「これらの島々の領主で五十歳になる殿が病気になった時に、その頃横瀬浦にいたコスメ・デ・トルレス師（のところに使者を遣って）、司祭が傍に留めている一人の医師を自分のところに派遣してほしいと願わせた。・・・それゆえ司祭はこのことを二カ年以上も延ばしていたが、ついに当（一五）六六年になって、彼はルイス・デ・アルメイダ修道士を、一人の日本人説教師といっしょに派遣することに決めた。（この説教師が選ばれたのは）彼が我らの主なるデウスからこの新しい企てに着手するために特別の才能と手腕を授けられていたからである」⁽⁵⁾

アルメイダ修道士がロレンソを伴い、口之津を出発して五島で布教したのは、1566 年 1 月 15 日（永禄八年十二月二十四日）から同年 9 月のことであった⁽⁶⁾。

1566 年 10 月 20 日付、アルメイダ修道士の書簡は、直接現地を布教した当人が五島キリシタンの創始について述べた貴重な長文である。

「翌日、彼は私のもとに使者を遣わし、説教を行なう家は彼の邸であると伝えた。その邸はこの島で最良のものであるが、彼の嫡男が二十五歳の時、同邸で亡くなったことから、占いにより（不吉）であるとして）そこを住居にしていない。邸は町中で最良の地所にあつて、町の中央に位置している。・・・領主より使者が遣わされてきたので、我らは彼の邸に赴き、はなはだ大きく、明るく照らされた広間に

入った。そこには男がおよそ四百名いるほか、この広間に隣接する別の部屋には婦人らがいた。部屋は幾つかの非常に薄い板の戸によって仕切られているが、説教を聴くため、（板戸を外して）全体を一つの部屋にしている」⁽⁷⁾

「私の宿となっている家はそのような人々が訪れるには幾分小さかったので、領主は私にたいそう立派な家を与えた。そこは先に述べたように、私が彼の命により説教を行なった所であった」⁽⁸⁾

「領主は非常に喜び、さっそく教会のための地所を我らの望む場所に与えることを約束し、さらに修道院建設への援助や、キリシタンになることを望む者にはその許可とともに異教の祭りへの参加を義務づけられぬようにすること、その他多くの便宜を与えると約束した。また、彼は我らに一つの地所を与え、そこからの収入の半分を慈善事業のため教会に寄付した」⁽⁹⁾

最初の説教所は「町の中央に位置した最良の地所」で行われた。邸の広間には「男がおよそ四百名いるほか」というから、一人 1 m²として邸の広間面積は 400 m²（約 121 坪）を下らなかっただろう。彼はその家を与えたが、余りにも大きいため受け取らないのを認めると、領主は教会のための地所を望む土地に与えることを約束した。この部分は、教会の立地について、アルメイダ修道士が自ら選定できる状況となった経過が述べられて、注目すべきところである。

1.2 教会の建設

上記のアルメイダ修道士の書簡は、教会の建設について述べている。

「領主は私が自分の家を持たず、また、領主の家は余りにも大きいため私が受け取らないのを認めると我らに（他の）家を与えることを決めた。かくして実行に移し、短期間ではなはだ美しい木材を大量に集め、まず初めに私の希望に従った（家の）図面を求めた後、多数の職人を動員して教会（の建設）に取り掛かった。私は彼の善き望みを知って、図面を送らざるを得ず、彼がそのような労を取ってくれたことに感謝した。教会は非常によく囲われた地所に建てられ、ほぼ町の中心にある。地所は一方が傾

斜して海に達し、人手によっておよそ一ランサ（槍）半の高さに（盛り上げて）造られ、奥行きと幅はおよそ一投石半の長さがあり、多数の果樹が植えられている。ここはかつて領主の祖父が住んでいた土地であった。この家は彼が奥浦の町のために与えた家とは別個に建てたものである⁽¹⁰⁾

この教会の場所について、『五島編年史』は「安養寺川ノ北東カ颯川町カ」⁽¹¹⁾と推定しているが、これらの地は町のはずれの方になり疑問が残る。

上記書簡から抜粋すると、「教会は非常によく囲われた地所に建てられ、ほぼ町の中心にある、かつて領主の祖父が住んでいた土地」で、その形状は「一方が傾斜して海に達し、およそ一ランサ（槍）半（約 2.7m）の高さに（盛り上げて）造られ、奥行きと幅はおよそ一投石半（注：a stone's throw とは近い距離を指す）の長さ」となる。「領主の祖父の居住地」は不明だが、江川城の敷地の一部または隣接地らしいと想定可能であろう。「町の中心」とは賑やかな港町辺りの中心と考えられるので、その位置は海辺と河辺の中央部、つまり江川の河口部辺りと推定される。『グスマン東方伝道史』では、教会地の環境を、奥浦に劣らぬ佳景の海岸町で森林に囲われた地と述べている。

「いるまんが小値賀（注：大値賀が正）の町に戻る」と王は町に教会建設を命じ、その地所を指定した。

それは海岸にある町である故に奥浦に劣らぬ佳景の地で、鬱蒼たる森林に圍繞されている⁽¹²⁾

また、「非常によく囲われた」「一方が傾斜して海に達し」「奥行きと幅はおよそ一投石半の長さ」からは、周囲が道で囲われた一辺約一投石半四方の海に接した区画と想定できよう。そこで、嘉永三年の『福江城絵図』⁽¹³⁾を検討すると、城下のさまざまな街区形の中に、果たして条件にあう地所を一カ所見出すことができた。場所は河口部右岸の旧角地の区画で、約 60m 四方（3600 m²=1090 坪）の面積約 1100 坪の地である。以上の考察により、福江教会の位置は、河口部右岸の旧角地（現在の栄町）の区画であったと推定する。船の出入りに重要な地点として河口港の当地を選んだのであろうと考えられる。

アルメイダの一年後に五島に着いたジョアン・パウテイスタ・デ・モンテ師の 1567 年 10 月 26 日付書簡がある。

「五島の領主の地においては同領主の命による教会の建設がすでに始まっており、私はこれを完成させるために努めた。教会は昇天の祝日頃に完成し、私は同所に移った。キリシタンらが私のため修道院をいかに迅速かつ熱心に整えたかは真に一見すべきものがあつた。翌日、終日働き作業を行ったが、これは私が百名の職人を雇うとしてもなし得ないものであつた。運び込まれた敷物（畳）は数多く、教会のみならず、日本の習慣通りに修道院にもこの敷物を敷き詰めた。夜、領主がたいそう威儀を正して私を訪問した。当地で我らが行なった最初の洗礼は約八十名のキリシタンに対するものであり、彼らは昼夜を分かたずはなはだ熱心かつ注意深く祈禱を学んだ」⁽¹⁴⁾

これにより福江の教会は 1567 年（永禄十）の昇天の祝日（5 月 20 日）頃に完成し、さらに修道院が整えられたことになる。領主の依頼によりアルメイダ修道士の描いた図面を参考に着工され、デ・モンテ師が翌年に完成させた。日本の習慣通りに教会と修道院は畳敷きとしたらしい。約八十名のキリシタンに最初の洗礼を与えたことから、教会の建物規模は、延べ面積で一人当たり 2 m²とすると約 160 m²（=48 坪の約 50 坪）と想定できるだろう。

1572 年イタリア人ヴァラレージオ師の書簡に、福江教会で墓地が作られた経緯が述べてある。

「この五島に着いた時、私は教会がある日本の他の地方が有しているようなキリシタンを埋葬するための墓地がないのをたいそう奇異に思った。そこで彼らは大いに心を動かされたので、さっそく、非常に適した場所を選び出してこれを塀で囲い、公子のドン・ルイスや国の貴人たちからもっとも身分低き人々に至る迄、夫人や子供も残らず全員がいと多大な熱情と信心とにより肩に担いで石を運んだ」⁽¹⁵⁾

福江教会につくられた墓地の場所について、「非常に適した場所」以外に手がかりはないが、墓地建設に公子から身分低き人々まで参加したことを考慮すると、教会地内の最適地に設けたかと推察する。

2. 奥浦

2.1 教会の位置

1566年10月20日付、アルメイダ修道士の書簡には、福江の教会建設に続き、奥浦にも教会を建てたと述べられている。

「前述の祭礼を終えた後、当地（大値賀）から約一里半にある某所（奥浦）に行く必要が生じた。・・・町に到着すると、彼らは我らを町内にある最良の家に宿泊させた。この町には寺院が一つあって、年に四回祭りを行なわねばならなかったので、彼らはその寺院を取り除く（許可を）得、代わりにデウスに祈りを捧げる教会を建てようと望み、領主はすぐにこれを許可したので、彼らは大いに喜んだ」⁽¹⁶⁾

奥浦教会の位置はどこであろうか。奥浦は直線距離で福江の北5kmの地点だが、「大値賀（福江）から一レグア半（約8.4km）」と道のりで示されていた。『福江市史（上巻）』に、「教会の位置については二説があり、一つは栄林寺前の寺屋敷跡とし、一つは浜泊の烏帽子瀬とする説である。後者については、現堂崎教会がかつての教会を望む位置に建てられたという論拠による」⁽¹⁷⁾とある。

現堂崎教会の対岸にある字烏帽子瀬に古い遺構は聞かない。論拠となる「かつての教会」とは、おそらく明治期にマルマン神父が活動した裏側の大泊の方向を指したのかと思われる。また『五島編年史』に、「ソノ会堂ノ址頼ルベキ史料ヲ得ズ。同村助役中村清光氏曰、浜泊ニ昔、会堂アリシト伝承スト。而シテ土地ノ状況略本文ニ合致スル所アリ、即チ、奥浦村平蔵郷字烏帽子瀬二一五五番地ナリ」⁽¹⁸⁾とある。字烏帽子瀬に二一五五番地はないので、大泊の西南800mにある字草津二一五五番地のことであろう。現在、碑が建てられている。しかし、この草津の御堂についてもマルマン神父の関連建物と思われる。従って、いずれも十六世紀に建設された奥浦教会との関係はみられず、説と云える根拠はないであろう。

次に前者の栄林寺前の寺屋敷跡のある奥浦の地についてみる。アルメイダ書簡には、教会地について以下のように述べられている。

「さっそく、彼らは連れてきた人たちに命じて、教会のための立派な敷地を造ったが、それは町の最良

の場所にある。すなわち、同所は海に突き出た岬で、高さは二ランサ（槍）あり、上の地所は（長さが）四十ブラサで、幅はおよそ十五ブラサである。その中央には大きな川が流れ、海に注いでおり、周囲には非常に青々とした樹木が茂り、その下に集落がある。集落と教会の周囲はことごとく松が生えているためにはなだ爽快な土地であり、松は無数にあって伐採を禁じていないので誰でも望みどおりに採ることができる」⁽¹⁹⁾

文中に「町の最良の場所にある海に突き出た岬」「高さは二ランサ（槍）（約3.3m）あり、上の地所は長さが四十ブラサ（約66.9m）、幅はおよそ十五ブラサ（約25.1m）」「その中央には大きな川が流れ、海に注いでおり、周囲には非常に青々とした樹木が茂り、その下に集落がある」と、教会、集落の地形や位置関係が表現されている。この特徴的な「（湾内にあつて）海に突き出た岬」の地形は奥浦にしか見られず、草津にはない。地形状況は『福江管内図』（昭和四十六年、1/25,000）から確認できる。このことから教会の建設は、現在の奥浦集落の地で行われたことは明らかであろう。

2.2 集落形成

この奥浦の集落形成について細かくみてみよう。寺院と祭場を取り除いて教会とした地は町の最良の場所だ、というアルメイダの記述がある。

「さっそく、彼らは連れてきた人たちに命じて、教会のための立派な敷地を造ったが、それは町の最良の場所にある」⁽²⁰⁾

現在、奥浦集落は福江から土岐へぬける主要道の途中にあり、奥浦湾の最奥に位置し、集落の西側は山が迫る。

「海に突き出た岬」のところは、両側で川が湾に注ぎつつも、道は丘上の所で一番高く、丘上は湾最奥部で眺望景観が優れている。この特徴的な「海に突き出た岬」の地形は、現在の奥浦湾に突き出た和布崎神社のある小岬のことであろう。岬は二段になっていて、下は二ランサの高さ、上は長さ四十ブラサ、幅は十五ブラサの広さが想定できそうである。

配置にあたっては、十字架が港からも村からも見られるようロケーションを考えて建てられ、教会と王宮が建設されたことがわかる。

「この宴は、教会の正面内の一角に高さ四ブラサ以上もあるきわめて出来栄のよい美しい十字架一基を立てた後に行った。それ故、港に入る船や町の住民はことごとく十字架を見ざるを得ない。領主は休養に出かけた際にここを通ったが、十字架のあるこの土地が非常に気に入ったので、今は使っていない彼の非常に美しい家以外に当地に家を建てることを望まないと言い、さっそく、実行に移してその家を海路により運ばせた。家はまもなく建てられたが、キリシタンは領主が全所領においてデウスの教を庇護している様を見ていっそう力を得た」⁽²¹⁾

教会を完成し、背後に十字架を建てた後、下記のごとく祝いの式を催した。『フロイス日本史』では「日曜日と、栄光の洗者聖ヨハネ（誕生）の祝日にあたる月曜日に、私は二度洗礼を授け」と記している⁽²²⁾。

「キリシタンへの訪問は十分でなかったが、当地に滞在したおよそ二十日間で私はしばしば進物を携えた彼らの訪問を受けた。・・・日曜日と、聖ジョアン・パウティスタの祝日の月曜日、すなわち六月二十四日、私は二度洗礼式を行い、両方で百二十三名が洗礼を授かった」⁽²³⁾

教会堂の建設規模について、教会敷地は「長さ四十ブラサ、幅は十五ブラサ」とあることから敷地面積 $1679 \text{ m}^2 = 509$ 坪の約 500 坪。洗礼は二度に分けていて、一度に半分の六十二名に洗礼を与えたとすると、福江と同様の算定で、教会の建築規模は約 130 m^2 (=39 坪の約 40 坪) と想定できるだろう。

教会と十字架は、教会地にどのように配置されたのであろうか。浦川和二郎『五島キリシタン史』は、「その（注：祝宴）前に教会堂の背後なる高地に高さ四尋（ブラサ）余りのすばらしい十字架を建てた。この十字架は高い所に立って居るので、・・・」⁽²⁴⁾と、教会堂の背後の高地に十字架を建てた表現だが、「上の地所」の教会地より高所に十字架があるのかと疑問が残る。アルメイダは先例のように「この宴は、教会の正面内の一角に高さ四ブラサ以上もあるきわめて出来栄のよい美しい十字架一基を立てた後に行った」と述べたが、フロイス『日本史』では、この部分を次の表現に言い替えている。

「この祝宴は、私が彼らといっしょに教会の背後の小丘に美しい十字架を建てた後で催されたのです

が、・・・」⁽²⁵⁾

おそらく、信者百二十三名と異教徒たちの祝宴は、海側に面した教会正面の前方で行われたのであろう。アルメイダはその宴会場から教会の正面を視野に入れ、またその反対側（海側）の岬先端部の小丘の十字架を見下したロケーションを書簡に表現したとみられる。一方フロイスは、教会と十字架の関係を客観的に見直し、教会敷地横の道路側から見たように描いたと考えられる。要するに、「海に突き出た岬」において、上に教会を建て、下の小丘に十字架を配置したとみられる。昭和五十二年測量の $1/5000$ 地形図によると、主要道の北側丘に教会地相当の整地が確保できる箇所がある。仮に敷地奥行 15 ブラサ（約 25.1m）、教会堂を $13\text{m} \times$ 幅 10m の長方形としても、建物正面を海側に向けて十分配置できる広さがある。

また奥浦教会の建設工事は、期間はおよそ二週間で、福江から百二十四人を超える大勢の人々が加勢し協力して行われたことが読み取れる。

「この奥浦に滞在して数日後、大値賀のキリシタンらは当地（奥浦）に教会が建設されることや、地所を整えるための人を必要としていることを知ると、二十四人が馬に乗り、鋤やその他の道具を持った百人以上の労働者を伴って訪れ、我らが行う工事において何かの功德を積むために来たと言った」⁽²⁶⁾

アルメイダが「その下に集落がある」と記した地は、現在、集落下手の「大工町」の字名が残る所であったろう。当時は海沿いに船大工集団が居住し、丘に寺院と広場がある集落であった。戦国時代に軍船をつくらせていたといわれ、寛永年間にキリスト教弾圧で奥浦の船大工たちが他所に移住した歴史がある⁽²⁷⁾。「大工町」から教会地にかけての集落エリアは、「ニタン坂子」「クララ」「クラン野」の異色な片仮名混じりの字名が並んで教会建設後の集落形成を示し、これら字の西の山側に集落墓地が形成されたことをうかがわせる「墓ノ上」の字名の地がある。これらの教会、集落、墓地は、かつてのキリシタン集落形成の跡と考えられる。デ・モンテ師の 1567 年 10 月 26 日付書簡に、五島で当時唯一の存在だった奥浦教会の使われ方や墓地のことが述べられている。

「同港（奥浦）の住民はことごとくキリシタンで、1 年前にルイス・デ・アルメイダ修道士から洗礼を授けられた。降誕祭の三、四日前に到着し、キリシ

タンから多大な愛情と歓喜をもって迎えられた。・・・降誕祭にはミサの勤めを見ようと、五島の他の地方からキリシタンが一人残らず来て、各人はその習慣に従い、私に対してそれぞれの力に見合った訪問を行なった。私は降誕祭のミサを三度行い、彼らは多大な信心と崇敬の念をもってこれに参列し、深い喜悅とともに主（なるデウス）を讃えつつ終夜、教会で過ごした。・・・この間、教会には絶えず土地の重立ったキリシタンと、その他多くの人があり、武装したキリシタン四名が聖なる墓を護った」⁽²⁸⁾

以上のイエズス会日本報告集と地元資料をもとに、十六世紀に建てられた五島の教会施設等の集落形成について次のように仮説を立てた。

1. 福江教会は江川河口の右岸角地の位置に建てられ、1567年（永禄十）の昇天の祝日（5月20日）頃に完成した。約1100坪の敷地に、約50坪の教会建築、及び修道院を建てた。
2. 奥浦教会は奥浦の湾に突き出た岬の位置に建てられ、1566年（永禄九）の栄光の洗者聖ヨハネ（誕生）の祝日の前日（6月23日）に完成した。約500坪の敷地に約40坪の教会建築を建てた。
3. 福江と奥浦の教会の建設に当たっては、いずれもアルメイダ修道士が教会の建築図面、位置を決定し、集落の中の理想と考えるところに教会堂を実現した。その際、港に入ってくるどの人にも村人にも見えるよう最良のロケーションが考えられ、建設に際しては福江、奥浦のキリシタンの協力関係がみられた。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 26420633 の助成を受けたものです。また資料収集にあたり、長崎歴史文化博物館、五島観光歴史資料館、五島市役所、奥浦出張所、長崎総合科学大学附属図書館の方々にお世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

脚注

- (1) 中島巧『五島編年史』上巻 p.142
- (2) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第3巻 p.47

- (3) 内閣書記官室記録課『日本西教史』上巻 p.295
- (4) 脚注(1)に同じ p.145
- (5) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史9』pp.219-221
- (6) 脚注(5)に同じ p.225、ルイス・デ・グスマン著、新井トシ訳『グスマン東方伝道史』下巻 p.24 p.31
- (7) 脚注(2)に同じ p.122
- (8) 脚注(2)に同じ p.131
- (9) 脚注(2)に同じ p.133
- (10) 脚注(2)に同じ p.139
- (11) 脚注(1)に同じ p.165
- (12) ルイス・デ・グスマン著、新井トシ訳『グスマン東方伝道史』下巻 p.29
- (13) 『福江城絵図』嘉永三年、長崎歴史文化博物館収蔵
- (14) 脚注(2)に同じ pp.248-249
- (15) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第4巻 p.167
- (16) 脚注(2)に同じ p.137
- (17) 『福江市史（上巻）』 p.1003
- (18) 脚注(1)に同じ p.162
- (19) 脚注(2)に同じ pp.136-137
- (20) 脚注(2)に同じ p.136
- (21) 脚注(2)に同じ p.137
- (22) 脚注(5)に同じ p.253
- (23) 脚注(2)に同じ p.137
- (24) 浦川和三郎『五島キリシタン史』p.18
- (25) 脚注(5)に同じ p.253
- (26) 脚注(2)に同じ p.136
- (27) 脚注(17)に同じ p.1003
- (28) 脚注(15)に同じ pp.247-248

参考文献

- (1) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』1998
- (2) ルイス・デ・グスマン著、新井トシ訳『グスマン東方伝道史』下巻 1920
- (3) 浦川和三郎『五島キリシタン史』1973
- (4) 中島巧『五島編年史』上巻 1973
- (5) 福江市『福江市史』上巻 1995